

山形県朝日町のエコミュージアム

～大谷風神祭のとりくみ～

安藤竜二

NPO 法人朝日町エコミュージアム協会副理事長

1. 大谷風神祭の概要と問題点

(1) 大谷風神祭の概要

本日は遠いところお招きいただきありがとうございます。昨日は、まほろばコースで神聖な白山平泉寺を訪ね、小学生達の懸命な発表を聴き、また左義長をはじめ様々な郷土芸能に触れ大変癒されました。そして感化されました。こちらのエコミュージアムの取組みを拝見して、勝山のエコミュージアムは、とても理想的な形で進んでいるなと感じました。

そして私は、こちらこそが泰澄上人の開いた白山信仰の本家と知って大変驚きました。実はここに来るまで石川県だと思っていました。そして、とても因果を感じました。なぜなら、これから私が発表するのは、朝日町エコミュージアムでこれまで2年間取り組んできた白山神社のお祭りのことを発表するのです。

では、始めさせていただきます。どうぞよろしくお願います。朝日町エコミュージアムでは、サテライトを16エリアに分けています。朝日町ワインだけは1つの工場のみとなっています。私達は25年間、このエリア内にある様々な宝に光をあてる活動をしてきました。

そして、昨年までの2年間は、秋葉山エリアの中心地「大谷」地区の「風神祭」に光をあてる活動に取り組みました。ここは、とても変わったところです。というのは、平安時代に菅原道真の側室一党20世帯が移り住んできたという伝説があり、村造りも小京都造りの基盤の目のようになっ

ていて、天神様も4つあります。そして、これから紹介する風神祭は、その大谷天神宮と白山神社のお祭りなのです。この白山神社の歴史は古く840年に開かれています。昔はその二つの神様が御輿に乗って村を練り歩いていたのですが、現在は天神宮が江戸末期に焼失し、その後再建できずに、合祀された白山神社の祭りとなっています。

これからご説明する祭りの概要は、私自身が大谷に住みながら知らずにいて、今回のエコミュージアムの取組みで地元の皆さんや専門家の皆さんに教えていただいて分かったことです。

大谷は200ヘクタールの水田に囲まれています。そして山間部で地形的に水稻栽培が難しいところでもあるので、昔から冷害とか台風がとても心配な村だったのです。そこでその台風の被害がないように、風の神や地元の神々にお願いする「風神祭」が大切なお祭りとして位置づけされてきたのです。

朝日町最大の夜祭り風神祭の始まりは、500年程前の飢饉の時といわれています。その時に、たくさんの人が亡く



写真1 田楽提灯行列



写真2 神輿

なりその供養も兼ねた祭りとなっています。

神輿巡行の先頭は、天狗のいでたちの猿田彦の命が案内役を務めます。そして、大獅子は神輿が通る前に、悪魔や魍魎魍魎たちを露払いします。

それからこの祭りの象徴ともいえる田楽提灯行列。子どもの数だけ昔は歩いたので、200人以上の提灯行列だったそうです。現在は、250戸程のとても小さな集落です。ちなみに朝日町全体の人口は現在およそ7500人です。

そしてこれが御輿ですが、この大谷地区の御輿は古式どおりに行われます。よそのように、ワッショイ、ワッショイ昼間は動かないのです。本来神様は光が苦手だそうです、夜に静かに村の中を練り歩きます。だから夜祭りなのです。この神輿の中に今現在は白山様が乗っていらっしゃいます。

そして、御輿の後に地区ごとの屋台（山車）が続き、辻6ヵ所で5分ずつ演じます。神様や霊、そして観衆を楽しませる役割です。初めは、県の無形文化財になっている浦小路区の角田流獅子踊りです。250年前ぐらいに宮城県から伝えられた供養獅子です。戦後廃れかけましたが30年前の若者達が練習を重ね復活させました。次の田中区からは笑わせる屋台となります。この写真は日本昔話の桃太郎を演じている所です。シナリオ通りには進まないおもしろい展開が演じられます。周りで見ている沢山の人をどれだけ笑わせられるかがステイタスになっています。実は、私は神聖なお祭りなのに、こんなに面白くして本当にいいのかなと疑問に思っていたのですが、昨日の左義長や本日の片瀬銭太鼓を拝見してお祭りって面白くて楽しくていいのだと本当に思いました。次の立小路区のテーマは女装

+ダンスパフォーマンスです。これは現代風ですが「マツケンサンバ」で腰元の格好をして踊ったこともあります。実は私の地区です。3年前にAKBの「会いたかった」を踊りましたが、私が年齢的にその年で卒業だったので、センターを努めさせていただきました（笑）。これは峯壇区の時代劇「水戸黄門」です。その他にも桃太郎侍とか銭形平次とか人気の時代劇をやって笑わせます。こうやって6区が辻々で演じて楽しませます。

それから露店がたくさん立ち並びます。たった200戸の集落なのに、朝日町で最も露店商が集まってきます。それから地元のお店が出している100年も続いている露店もあります。自分の店の前で玉こんにやくや饅頭を販売しますが、大獅子が饅頭1パックを口から手を出して食らうのが目玉になっています。露店商の方によると大谷はとにかく人が集まってくるから商売になるのだそうです。

それから今回この大谷風神祭に光を当てるにあたって、特に驚く歴史を持っていたのが打ち上げ花火です。なんと江戸時代から大谷地区には、職人がいて、花火を作って、白田家と大谷家が競い合って花火を打ち上げていたのだそうです。もしかしたら県内で1番古い打ち上げ花火の歴史をもっているようです。でも、花火は主人公ではなく、あくまで風祭りの背景なのです。神輿巡行が村の中を練り歩くその後ろに花火が上がるのです。

そしてこれは「盛砂」です。神様が歩く道の真ん中に30センチ間隔くらいで新しい清らかな山の砂が点々と盛られます。これがとてもめずらしいことが分かりました。これは神様が通る道を清め、道しるべともなります。そして、



写真3 屋台の演し物 水戸黄門



写真4 盛砂

それぞれの家に盛砂を繋ぐことによって、ご利益を各家庭にもいただけるとされており、それぞれの家の縁側にはろうそくが灯され、果物や野菜、だんごのお供えがしてあります。ちなみにこの砂は、神輿が通るまでは絶対に踏んではいけないのです。私は今まで知らなくて平気で踏んづけていました。

それから消防団です。若い頃は何でお祭りに消防団が駆り出されなくてはいけないのかと思っていたのですが、大切な役割があったのです。元々風祭りはろうそくの祭りだったのです。田楽提灯のほかにも、いたる所に提灯が灯され、通りごとにも大きい箱形の提灯がぶら下げられていました。今はだいぶ電気になってしまったのですが、その火の番をするのが消防団だったわけです。

それから串花があります。これは、先ほどの屋台が面白ければ面白いほどお祝いをいただけるわけですが、そのお返しに串花を記念に持って帰っていただく。これが外から見にいらした人が、この祭りに参加する唯一の方法になります。しかし、外の人にはなかなか伝わっていなかったもので、そういったことを広めていかなくてはと思いました。

(2) 問題点

ところで、この祭りにも問題が出てきています。エコミュージアムを25年もやり、朝日町のアイデンティティは少しずつ取り戻せたと思っていますが、残念ながらうちの町も人口減少は止まりません。駅がないこともあって若い人たちは結婚するとやっぱり便利な大きな町に出てしまいます。この大谷地区も同じで、どんどん人がいなくなり、戦後の提灯行列は200人の子どもがいたのが今では30〜40

人しかいなくなりました。現在は他の地域の子どもにもお願いして参加してもらっています。

また、農業従事者も減少し、農業していない住民にとって、風神祭は関係ないと思う方も現れ、祭りを簡素化しようという動きが出ています。台風は春分の日からの250日目から来るということで、必ず前日の8月31日に開催するのですが、平日にならないよう土曜日に固定しようと提案しているのです。なかには保存会を作って小さな形態だけ残そうという声もあります。

原因は、時代の流れとともに、祭りそのものの本質が見えなくなっていることもあると思われました。地区の男達はほとんど行列に参加しますから、自分のパートのところはよく知っているのですが、それ以外のところがどんな役割でどんな意味があるのか、全体が分からなくなっていたのです。

具体的に挙げると、最も基本的なのですが、御輿に何の神様が乗っているのかすら分からなくなっていました。風神祭だから風の神様なのか、白山の神様なのか、天神様なのか。風神祭の神事は神社の中ですべて終わり、神輿には氏神の白山様の分霊をお載せして巡行するのだそうです。

それから、御輿が来ても手を合わせない方がほとんどです。それは信仰なので合わせない方がいても仕方ないのですが、初詣は行くのにちょっと寂しいことです。さっきの盛り砂の意味もほとんどの人が知りませんでした。それから、田楽提灯の絵柄も昔は五穀豊穡を願った絵柄がいっぱい付けられましたが、アニメの絵柄が多くなってきています。それから象徴の田楽提灯よりも山車の方がおもしろいので、各区でもそちらに力を入れるようになっていきます。大獅子は、元々暴れ獅子じゃなかったのですが、だんだんエスカレートして暴れるようになり怖い獅子になってしまいました。また、縁側に神様用のお供えをする家がわずかになってしまいました。風景的にも美しかったので、これも残念なことです。神輿を守りながら同行する神主を守るための赤い番傘も雨が降らないのにナンセンスだと開かなくなりました。これらはほんの一端です。

それから元々村の祭りなので、外の人を相手にした観光受入れ体勢は整っていません。ところが、この祭りは面白いのでどんどん人が見に来るお祭りになってしまったの



写真5 聞き書き調査

です。ところが案内パンフレットもなければ、トイレの場所も不明確で、今年は駐車場に入り切らずクレームも出ました。そういう観光しづらい面があります。

2. エコミュージアムの取り組み

(1) エコミュージアムとは

そこで、この祭りにエコミュージアムをあえてぶつけてみたらどうなるかということで、今回思い切って光を当ててみたのです。簡素化するのとは仕方ないことですが、本質を大切にしたいよりよい形になるよう寄与させられたらという思いがありました。また観光としても成り立たせたいと思いました。

では、具体的にどのような方法で光を当てたかご説明いたしますが、その前に日本エコミュージアム研究会が作ったエコミュージアム憲章でエコミュージアムを振り返らせて下さい。これは定義です。ここにエコミュージアムの大切なことがすべて書いてあると思っています。

エコミュージアムは地域社会の内発的、持続的な発展に寄与することを目的としています。そして、環境と人の関わりを探る活動と仕組みなのです。環境だけを表す博物館ではないのです。「環境と人の関わりを探る」ここが大切なテーマとなるわけです。

朝日町の第三次基本構想では「エコミュージアムは朝日町の住民にとって見学者であると同時に出演者であり、町

全体がまるごと博物館であり、住民誰でも学芸員になる」としています。これが朝日町エコミュージアムです。

(2) エコミュージアム活動/調査事業

朝日町エコミュージアムの活動は、大きく分けて調査事業と普及事業に分けられます。

まず調査事業ですが、「宝ファイル」というのがあります。まずこれを確認することから始まります。この宝ファイルは二度のキャンペーンで集めた町民が思う朝日町の宝の投稿ハガキのファイルです。朝日町のことなら物でもエピソードでもなんでもいいので教えて下さいと呼びかけました。全部でおよそ 1000 件の宝がストックされていて、調査対象のデータベースとなっています。

町民が寄せてくれたこれらの宝の中に風神祭に関するハガキを探しました。また、長年培ってきた教育委員会の出版物や資料に風祭関係のものが無いかを調べました。幸いなことに私達の活動するエコミュージアムルームの隣は教育委員会の歴史編纂室であり、さらに幸いなことに現在は、私達朝日町エコミュージアム協会の理事長がこちらの室長も務めることになりました。こうして、関わる個人や団体をピックアップすることができました。

そして、風神祭に関わる主要な住民の皆さんに「聞き書き調査」に入りました。具体的には、風神祭実行委員会、宮司、大谷地区の歴史研究者、花火に詳しい方、提灯絵師の家族、100 年出している屋台のお店、各区長、大獅子に



写真6 エコミュージアムノート



写真7 田楽提灯作りワークショップ

詳しい方など、20人以上の皆さんに伺いました。調査は大学生にも協力していただきました。

そして、聞いたことはテープ起こしをして文章にまとめ、1枚の「エコミュージアムノート（博物館ノート）」に編集します。聞き書きの文章は雑誌のようにライターの私感を入れて書くのではなく、その方の口語体になっています。必ずその方のプロフィールも入れます。この聞き書きはガイドブックやホームページにまとめられて「保存」されます。

(3) エコミュージアム活動/普及事業

そして普及事業です。教わった地域の宝が町民全員の財産になるよう、毎回様々な方法を試みています。まずは、先ほどの聞き書きしたエコミュージアムノートです。これは「エコミュージアムルームだより」の裏面に印刷して毎回全戸配布されます。ホームページにも随時載せています。身近な人の話が毎回載るので楽しみに読んでいただけるようです。

これはエコミュージアムルームに展示される「パネル」です。先ほどのエコミュージアムノートの内容をきれいな写真を配置して大きくきれいにパネル化します。毎回4つ分の宝を展示しますので、4人の住民の方のお話ということになります。コアセンターは文化センターでもあるので、来館した多くの人に見ただけです。

次は「見学会」です。主催見学会は風祭り当日に、大谷地区のエコミュージアム案内人が説明しました。また、この白山神社の注連縄作りの見学も行いました。また、その後の申込み制で受けている一般案内の時は、専門的なこと

については、案内人の他に先ほどの聞き書き調査でお話下さった方にもお願いしてお話いただいています。朝日町エコミュージアムの「案内」は、このように概要を伝える案内人と宝に精通する住民講師で隔々まで案内できる仕組みとなっています。

これは「ワークショップ」の写真です。子供たちに提灯行列で使う箱形の田楽提灯を、大工さん、絵付けの得意な方、区長さんなど年輩の皆さんに講師になってもらいましたが、箱になっていけばいいのだろうと安易に考えていましたが、実際はいろんな工夫がなされていました。特に、引っ越してきた家族には喜ばれました。出来上がった提灯は祭り当日にいくつも活躍していました。また、関連ワークショップとして、大谷地区に伝わる手仕事体験として、地元の方に講師をしていただき、縄ない、注連縄作り、しめ飾り、青苧糸とり、はげご作りなども行いました。

そして、やはりメインは「シンポジウム」です。今回は東北公益大学で風神祭や獅子踊りの研究をしている菊地和博先生に大谷の風神祭に関する講演と、地元の風神祭実行委員長さん、獅子踊り保存会の会長さん、地元の歴史家さんと一緒にパネルディスカッションにも参加していただきました。エコミュージアムの会場は必ずその地区の公民館や学校で開催することになっています。今回も中心地にある公民館を使いました。地元の方が気軽に参加できますし、知っている方がパネラーになるということで、毎回大勢



写真8 大谷風神祭シンポジウム



写真9 ガイドブック『大谷風神祭』

集まっていただけます。今回も小さな大広間に 100 人以上の方に参加いただきました。ちなみに写真のシンポジウムタイトルの横断幕は毎回器用な理事長が手書きで作ります。この手作り感がとてもいいのです。

菊地先生からは、とにかく大谷の風祭りが住民参加型で盛り上がっていること、歴史的にも、その方法も素晴らしいことをたくさん教えていただきました。さらに、先生は住民のみなさんに「教えて下さい」を何度も訊ねることがあり、とてもいい雰囲気になりました。そして驚いたのは、大谷と菊地先生のお住まいの東根市とは神官同士が歴史的に繋がっていたことが分かりました。実は東根市でも田楽提灯行列が行われていて、これまで少々ライバル視していたのです。会場からはどよめきが湧きました。皆さんに、とても有意義だったと感想をいただきました。

シンポジウムでは、毎回会場で「企画展」を行っています。今回は風祭りの昔の写真や新聞記事を募集して展示しました。とても良かったのは、すでにこの公民館にもたくさんの風神祭の写真が展示されていたのです。おかげで小さなロビーは充実した展示コーナーとなりました。

そして、総括として、ガイドブック『エコミュージアムの小径第 15 集 大谷風神祭』を「出版」することができました。エコミュージアムで出版してきたガイドブックには、大切にしていることがあります。それは通常、出版される歴史本と違って、先ほどの聞き書きの文章をそのまま載せるので、様々な人が本の中から風神祭を教えてくれるようになっています。今回も 30 人近い人が登場していま

す。もちろん、シンポジウムの講演やパネルディスカッションも収録してあります。

巻末には、それら住民の皆さんから教えていただいたデータをもとに、「大谷風神祭をもっと楽しむリーフレット」と題したチラシを付録にしました。これがあれば観光客ももっともっと祭りを楽しむことができます。今年の風祭りでは、さっそく全戸配布と当日観光にいらした皆さんに配ることができました。通常チラシやパンフは、観光協会や町の観光課の職員が印刷屋さんと作ってしまいますが、これはほとんど地元の皆さんから教えていただいたことをベースに作ってあるので地区の皆さんの成果といえます。おかげで、とてもいいものが作れました。

3. 成果

(1) 風神祭に関するエコミュージアムの成果

さて、ではこの朝日町エコミュージアムの取り組みが、エコミュージアムの目的である、「内発的・持続的な発展に寄与」できたのか？正直分からないことです。それに、本当にエコミュージアムが寄与したのかどうかは誰にも判断が付きません。私達は朝日町エコミュージアムの成果は、あくまでも博物館として地域の宝物を住民とともに光らせて普及するところまでと考えているからです。



写真10 祭りを楽しむリーフレット



写真 11 打ち上げ花火

エコミュージアムの成果として上げられることは、風神祭の知らなかったことがわかったこと。ガイドブックやリーフレットができて活用されたこと。新聞掲載により一時的に観光客が増えたこと。住民講師が増えて案内事業が充実したこと。案内人の勉強になったことなどが上げられます。

(2) 今年の風神祭で変化したこと

たとえ、その後風祭りそのものについてなにか発展的なことが起こったとしても、それはあくまで住民の皆さんのこれまで培った経験と気づきをもたらした成果です。決してエコミュージアムの成果ではありません。

とはいえ、エコミュージアム活動をすれば、そこになにかしら必ず変化や新しい芽が育つことを実感しているのも事実です。

今年の風祭りに変化が起きたことがいくつかあります。たとえば、暴れ大獅子に尻尾がつきました。暴れるようになったのはいつのまにか尻尾がなくなったからだと伺っていたのです。花火師のいる東地区では、前日の夜も花火を打ち上げました。祭りの花火の打ち上げ数も格段に増えました。観光協会が仙台市から参加者を募ってツアーを開きました。行列で神主を守る赤い番傘がいつも閉じていたのが開きました。来年もなにかしら変化が起こるかも知れませんが、何も起きないかも知れません。

ただ、何度も言いますがこれらはエコミュージアムの成

果ではけっしてなく、きっかけにはなったかも知れませんが住民が自ずと行った住民の成果なのです。

朝日町エコミュージアムでは、エコミュージアムの中に、町の経済につなげることを考えると、指導する「町おこし」的な部分は入れていません。

朝日町エコミュージアムが住民に対して教育したり教えたりすることはないのです。ただし、住民にとってみれば朝日町エコミュージアムは・学校になる・研究所になる・保護センターになる存在だということです。ですから、それら「町おこし」活動は、住民の皆さんの所属する団体や個人で、エコミュージアムの外の活動として存在すべきと、考えています。

「住民一人ひとりが学芸員」というコンセプトがあったからこそ、朝日町エコミュージアムは「住民に教えつけるエコミュージアムではなく、住民に教わるエコミュージアム」を展開できたのだと思っています。

最後に私にとってのエコミュージアムの座右の銘的な言葉を、日本エコミュージアム研究会前会長の大原一興氏の著書『エコミュージアムへの旅』で紹介された世界のエコミュージアム館長の言葉の中に見つけましたのでご紹介いたします。「エコミュージアム自身は何物も所有しないし、何物も新たにつくらない。つくるのは地域住民」(シグブリット・ウィルヘルムソン)。また「エコミュージアムは、触媒の役割。つまりエコミュージアム自身は変化しないが、他者が自ら変革することを促す力を持つ」(ピエール・メラン)。

これからも朝日町エコミュージアムは、朝日町の宝について住民の皆さんから教えてもらいながら淡々と活動を進め年輪を増やしていこうと思っています。10年後、50年後の朝日町にご期待下さい。

本日は拙い話を聞いて下さりありがとうございました。